特別
へ5
6681

貴
A5
6681

喜哉(アナウレシミヤ)の御詞、當宮の神言に、數篇乃道の大
本也、其後素盞嗚尊(ソサノヲノ)、清地(スガ)ふして世妙の御詠(ミウタ)
あり、しら世に傳へ、それよりはそれ、今
孫乃俳を唯ふるしの端ふして日に變し月
よ化して意味深長也固(ミナト)よ古(ムカシ)こと今(イニ)を
神霊にかなふ、歌し同茲(ヨツテココニ)思りを維俊清
の深きよりも俳翁曙磨り同志かも是
予(ヤツカレ)等をそれ肯三つなる所を一ふしく

音かゝ川の底をかすめく心なき魚せく自ら
廣前よりはるかに祖の島の西極より告なんず
なきりてひさに熊野島とゝのゝ

元禄七甲戌六月日

熊野本宮　小中南水
玉置安之

景福堂文庫

久保農かゝ沢茅一

元日

かゝ農くゝと唯九ほこし日ゝ　大坂　遠舟
梅白くさくへて音ゝ今朝の春　〃　由平
凡せくやか餅の長櫨歯果へて　〃　才磨
湖わらや生酒八うしろうに寒　〃　園水
祝りてや神の凡てゝろうゝ餅　伊後信　茅也

花鳥よりも欲しき日のうち　大阪　舟軒
夜ゝもいとゝの浮橋越よりゝ　西本
月花に懐よりあり蓋の乃松　赤川　花荘
門出乃根に破れ広うれ的山ゞ　三番　清流
秋の子や蛛肖乃中の桐くさゝ　八王子　梅晴
若松よ竹植そる明の戸や　大坂　入舟
元日や気のつき初ふる脂山　かゝ　あゝ
門出やさして乞香いなるしたゝ　南水

梅　拾句

香乃凡や古人かゝし梅の花　大坂　西露
誰よ人梅よやとゝふ傘乃音　桑門　滴舟
梅形ゝ女ちろよ自ひあり　かゝ　梅香
梅咲て斎藤こふ多祇れ　侍塚也尼　今員
梅ちりて磨塚さるまひ多　同尼氏　以悠
水の香よ舟夜こゝ乃ぶ梅　同紀氏　加安
切ゝふ女たりこゝ乃ぶ梅　同三宅　乃白

香入れて百丈梅の心底アリ　同村上　華仙

梅山家神さへ自ふ主宰賊　同あ江　華也

詠むとて梅典をし梅の花　大坂　遠舟

皐月戯言十句

麦畑いくそくぬ里乃夏月ヲ　都　如泉

さいた水星の鈴り乃ほとるヲ　大坂　休計

目ゐてさい破まて狂よかと懸り　赤川　花荘

蛍とんて狂しもくしく夏月園　柱りと　如水

夏月乃や行とさへ二書汎ひくり　堅平　松舟

梅梅乃ふまへ力や梅くら　大坂　葉舟

鶴の島蒲や節乃海人　倩後　乃白

旅舟よ水場告ゆくりくる　同志　如雲

裏居やまもり物ふくし　女文　長則

若竹やふいにおしさ巻生立　言芝

早乙女よ爲を行しゆる徒ヲ　水眞　如義

夏月雨天宮くくみぬ柳ヲ　大坂　伯舟

目乃屋く蛍なれや高瀬川　大坂　行子
朔日や海苔しきめる月の面　郡　可鴻
姑を燼くるる敢なりける　大坂　令極
代人の水入てくるる七月末　く　遠舟

水無月戯言八句

校なくて世よかくるる蓮かな　江戸　蘆翁
海かろしよ夏帯ふ高れ　大坂　武仙
庵必よ思日の外や富士まで　ゆ之　円知

夕涼こなるく雷乃松　大坂　又舟
いさくも荷葉ちこれ尼の居　堺住　水月
疫ちうも蚤よくい海月尺ゆ　吉見相月　松詠
蚤と敢よ乾されてこそ夜の月　ちせ　則重
柳や祢ゆ落なん　夜の月　大坂　遠舟

文月七日戯言六句

梶の葉や裏よい明日九転のる　大坂　由平
傾城や一葉の梶乃西うら　柏りと　松喜

手織下級俵能ちりし後星　安江　羊也

七夕よ夜乃敷乃ん　長崎　卜水

七夕や志やうつき初て義経川　京門　滴舟

芭蕉葉よ書てし挟し星の言　大坂　遠舟

秋乃物とて

祝ふ乃ち永い養生よ籠りより　大坂　来山

ちれくよ清乳い躍乃顕負ぶ　ケ云　南水

いなつまや見い泣出に窓の内　〃　一途

稲妻や志る人よ乃ふ船乃中　〃　長治

指て富士見ぬ人よ乃丈山　〃　和泉

世乃秋と余ろよう れつく落ぶ　亭蘭　雀黄

大口ふ云ても霧乃とうとふ　少山　如山

慄しや菊乃下れ牛のふん　郡　光友

榕乃辺ろき立ん新灯籠　〃　三枝

二丁ほと遠き枕よ雑うれ　大坂　一峯

盆黒つきぬ才乃恋し島祝事　倚度六坐　一歳

小車とく祈り合ふ女房哉　泉州　行止
稲妻よ踏くつしくる一つ橋　藝州　恒忠
蒼いよ酒碎乃来ル宇津の山　筑州　何春
青乃咄又ちりうへ月夜ふ　武州　八香
秋の夜い稼のエル浦急ふ　〃　未牧
南ふ橋乃響よ所ん長刀　〃　あく
文月や点ちふ人乃いそうぶ　大坂　本口
綾書や秋乃花をみらし　〃　遠舟

中秋晴　指三句

名月や鼠机一つよ人使く　大坂　萬海
月一つ吹ふ一つ吹ふ乃蕎　坂本　鶴舟
名月や笛を張るもんなし　軒屋　西本
張弘敢よ永い但せてよ乃脊　備後水江　草也
乃月暁ちぬ疲多れ　同分部　露言
乃月雲ふ乃酒のあるもなる　同七尾　今貫
名月も何と養ん鈴田人　同玉　笑草

名月や西方を向ん須磨明石　同村上　羊仙

名月やすゝけ障子机いたゞく　三番　清流

名月や人を寝させぬ須磨の浦　同　花蓮

名月やなくなき猿の尾　博徒　愚丸

詠るや水ま物ゝふるの月　梅吹　卜有

名月や寝ぬ気なるふ山鳩　大坂　遠舟

追て四句

名月やいつそ更て千尺くり　赤川　花荘

名月や眠る寝ぬ寝ぬ寝ぬ　仝

名月や晴乃ち雲ゝ明日雲ん　仝

名月や舟漕しるり海人　仝

冬ハ雪なと二拾句

茶中かな日南ちく形雪の宗　大坂　一孔

ある雪乃なと埋まぬそ踏の尾　なゝ　安ゝ

立雪や雪よいなを入らしない　長浜

踏ゝ雪ゝ雪乃名ぬしら女ゝ　一連

盡やいと海陸雪にかさくらき　〃　喜雲
初雪や芦辺里乃犬白し　大坂　半舟
寄りしや雪法ゑれる事綿賣り　天満　仙岳
初雪にたんしゝ物りや椽乃さる　藝良　恒忠
我ゑよと雀や告る今朝の雪　〃　信あ
一指乃襞弾りあり雪乃さら　伊予川口　嘉凡
雪小兎かくし蓑さ体常法ゞ　〃　似俊
国底雪をちらちら蔵家ゞ　同古賀　石白

松乃雪兎変させぬ磯うれ　〃　今貴
雪ぬ赤い情ゑらへよ石地蔵　くしゞ門　龍也
雪の穴や雪乃兎ぬ目の黒さ　都　忠時
初雪や郭中をぬゑ峯の松　三重　清流
見ゑゝ小し松よ重使り雪ぬ著　松ぬと　如水
初雪小起くゝ又変小移れ　赤川　花荘
雪乃赤と志郭八阿ゑる男ゑゑ　梅吹　卜有
ゑ集人情つる鳴乃雪ぬ音　大坂　遠舟

冬九中より十八句

極月て白き二つ目九火桶ゟ　大坂　虚月
風よ帆くらくくろ入江ゟ　柏原　松青
炭竈よ会仏を烟ちひゞ　江戸　言角
寒しや吉乃三日月あむ人　大坂　伯舟
寒の時西風今朝ハ賤屋の影ゟ　備後福山　如秋
浮世とて猪と乗きく九度ゟ　同村上　茅仙
鴨立て明六つ開し後しゟ　摂津小也　茅舎

然霜小葉乃柘榴もむしゟ　備後松田　茅迷
板橋や蓑ちゝ婦人今鈴蘭　同菅蟹　茅径
囲屏畫ゟ阪西と婦ゟ屋ゟ　鞆津　柳文
寒念仏や月代なくゝ霜　大坂　半舟
炭ちゝよゟと織ゟ楽坊ゟ　谷人
寒の戸や氷柱のさゝ代燥のゟ　長崎　古凡
寒ちゝ山ぬや光乃枕自分寒　和泉　沉汁
炉ちゝ高や寒ちゝむ壺火焼　大坂　一舟

鶴寺や雁ハ帰りて鮫の腸　大坂　仙舟

ゑとり居ハむしを語る火燵ぶ　備後あ江　華也

思ふ〻や姫ゐ嘆く雪丸桜　大坂　遠舟

花の句ハ俳諧もかゝく空十七句

良よ織出し雲よりれ乃綾　都　言水

たゝ山を小き門よ山さゝ　江戸　松凡

山桜下戸よ追ふ者光　大坂　舟彩

うゝめや桜よ弟ゐ山やけ〻　西休

泳て笠ゐ蓑ゐさゝゝぶ〻　本意

陳子明て花を行る光ぶ　安江　華也

瓜実乃痕俳諧や花乃昔　長尾　今栄

咲初し女乃乱ゝ糸さゝ　博信　水月

山川のゝ端をつゝとさゝぶ　丹及　一柏

責まを者ゝ酒屋よさゝ掘ゐり　本京　長治

我もまゝ桜よ法ん華屋ホ〻　一連

仙人ハ花咲山乃ゝさぶ〻　喜雲

花乃香よ葉よ移りてまさる色　信凡　傳法門

花の比人に葉の書行は屋れ　月出　一葉

撰とも花よ名の〳〵磯辺　〃　小文

枯地屋もせ仮ふ少へを山桜　〃一居彩　端也

葉の雅嵐破よりり花曽　〃　水友

書作たての文〳〵桜　大坂小山　如山

桜咲中よりけなる枝也　〃　重山

濃色やうつるも器る桜花　〃亭菜　雀蕉

花と花地ふ色〳〵幕れ円　柱もと　如水

花ちるい白結桜乃上れ　大坂　一行

行雲や結白ふをれさう　三番　清流

桜花散まて杉〳〵幕れ数　七文　八番

花さう師匠和雅に葉の文　〃　永也

水海を葉乃泳ケて偽れ　〃　令昭

無数ゆやさし仙家の花菊　〃　亜方

桜少へ美に雅ふと〳〵よう　〃　一逢

酒色くゝ下戸ふ酒あるゝ花ゝゝ　なにゝ　梅水
花まさてゝも酒のさうゝれ〳〵　播磨
まを信よ新乃こやる花ゝ酒〳〵　幸田
牙を一つ花のゝ山〳〵日本国〳〵　治言
杜宿し桜よゝゝく斧の音　彩文　青竹
追立一蜂と東内の山さゝゝ　藝州　政利
山里や桜よ雲のてゝか来酒屋　備後成川　柳水
花さゝふゝの白き鳥ゝ　同伊勢　清吹

気て花よゝを拡吉素人　同小野　素竹
うしゝゝゝし世よ不通ゝ花ゝ酒　同吉宮　古白
凡云て花乃色ゝ多新ゝ　同三宅　乃白
生ゝる事ゝゝゝ桜ゝ　摩津門石氏　蔵蒼
暖の花よゝたゝいゝゝ　同小池　孝彩
悟さうに接信仏ゝ花ゝ鐘　尾州　長利
合点ゝ人焼野亀の花ゝ　大坂　言窓
花よゝゝゝ乃事信ゝ事食〳〵　西湖

花さを人さ寄り新なる雀哉　京　安て

雪なんや梅よ房房咲の鞠　〃　南水

天満北野太鼓寺納会夏目

九重よ惜しと似る梅花　大坂　遠舟

尚乃柳むらふる乱れ髪　〃　口嘲

臘乃詩月を飄よる入て　〃　由平

追て三句も花すゝん

地水屋乃亭ゟ百日く花はまる　江戸　其角

梅咲内よ居ゝ乃い猫くゝり　大坂　遠舟

たゝの時も吉野を芳れ梅ゝ　〃　来山

椿を脱くて蓑しを地三句

猟門よ入て下る

庵前よ白く咲くる椿哉　大坂　児貫

手よ提て落るとゝん八椿哉　天満　一舟

白雪よ連て落ゝる雲れ哉　素門　備舟

山郭云ふ

ゝぬ春と称七句

かゝ云帰ふるゝや虚云ら　大坂　遠舟

山里に麦搗音のよかりけれ　備後安江　車也

都也人の噂おかしかりけれ　同彩武　加友

特質よ我乳とるやかりけれ　同志　和宗

弼を義しく子なるもんかりけれ　同河内　加雲

待ちひて森見鳥よかりけれ　長崎住　卜水

噂ぬる此命わしなかりけれ　遠尺　和詠

朝用下女の情らしかりけれ　三嘉　清流

一声や見のむしれぬかりけれ　拾り　如水

花の後いのち繋やかりけれ　安長　永也

五文交や初春よこゆかりけれ　〃　長治

一声や耳入数かしかりけれ　水真　勢義

ちらぬ東こそ慶せかりけれ　大坂　玉才

かりそめ結ぶ誓り事もなし　安文　言文

寂寞とやいひも月夜のかりけれ　くしの子　三弥

さらそ美家いとしかりけれ　〃　可笑

何乃本紙の墨衣用呼とり　大坂　風意

四季不同三十一句　寄鯨恋

我恋ハ千尋乃底より鯨　京　信徳

山ふきも桂の鯨の脂　大坂　定明

鐘乃声や桜ちるく目ハ眠らず　〃　文丸

いと拾ふや我よりつくる乃の絵　〃　文十

岸より流しけるもの乃浮世ぶり　〃　自同

座汁の濁りにしまぬ氷柱ぶり　〃　休計

浮草乃根をもに歩む蚌ぶり　江戸　蘭鳳

竜かり提灯さらはまたあらば　江戸　残角

宿よ尾居て画れや秋乃宣　下辻　則里

正本剣ル物草山や阿の腹　大坂　遠舟

小嵐や柳未さまて庭を掃　桂かく　利貞

春雨や蘭のつるむ巣ところ　大坂　如山

衣もよし鳥の痩つく氷ぶり　〃　木口

十月や古て懐し小傾城　三番　清流

紙帳よや敢と入つてみる夏の月　大坂　令極

白面や素女のとくも魁魁　大坂　一行
さらくに官女車をかりまうら　女玉　一連
今新月をいまいまぬ拾ひ　〃　梅水
意味いつよ指持儀よ素丸面　伊賀　癸悦
雪乃書に拾織ぬく山家ぶ　〃　癸草
手よ拾る水拾も玉乃なるとぶ　〃　時変
物ちくと拾もつ〳〵や竹　幕　〃　祐春
冨士乃雪をえぬもまと茶屋　大坂　芦転

なりしや磐こいふ成磯別人　大坂　遠舟
手よ拾て月らくく天〳〵松の月　女玉　南水
犬乃沈船中の出よ声もれし　日二階堂　令乃
蕪や寒の中れ天えうく拾　大坂　紫丸
表面れ寝見や丁と秋の乳　〃　西本
寒ふて会仏やさく家の松　赤川　花荘
児のりて牛と作ふちくとド　遠及　和泳
我忘や絲瓜と神る秋の孫　大坂　遠舟

四季同じうして

肩ぬいて没人賤し　山信水　江戸　一鼎

此ほとの現いせ苅るれ一重ト　大坂　藤舟

山色や馬乃耳ゆる杜の花　天満　青嵐

如月や仏の影なるうるを　大坂　卜有

才一つや脇乃垢とる秋の色　〃　遠舟

山陵や秋の木末よ子神ト　〃　葉舟

志ゝ月のうゝゝ白へと秋の業　備後　茅屋

物志くを一るぬ　孤雲　警倫

孤ル樵村木末よ星れ光り小　〃　八香

恰賣り乃人のとなやとなれ言　〃　長治

云神月義ゝ義ゝ沈し海人　〃　南水

のやゝとゝ和ゝ言ゝこゝ乃ひと海　大坂柏りと　松雪

登六時柳よ答やゝるうれ　八王子　千川

総角やはしゝ西乃ゝゝ浅　大坂　又舟

白魚やまいゝせ義乃ゝゝ色言　〃　本口

紙屋さして船さる波ゝ夕霧　大坂　舟彩

夕霞山のうせさる頃衣れ　藍及　信あ

吉柳よ松をとけをさすらぶ　政利

四星や天の川よへてわさわし　廣島小沢　茅舎

長生忘禅のをぬけも別とぶ　佐後　臣凡

今宵月鳥と落乃本うけぶ　くに世　有我

世を利て涼海はいうよ女良花　くに川口　辰凡

寒なきてみちりよ似うを蓮鮮　大坂　遠舟

四季不同　欲言出戀

義むしよ家もとのひ昼出　都　鷺水

新くさし古キ雑炊ゝふの月　大坂　岸紫

白菊やとうぬ姫乃くもより　赤川　花荘

霜形見の言と燼ふ山家ゝ　安江　草也

連よりゝ多アれ子多うれ言　三宅　乃白

行下話よ玉孔人の仏師乾ぶ　墨玄　松窓

如月や汚れ皮むく去拾人　大坂　遠舟

柳よ折りて書のやうなる　大坂　卜有〉
初霜花よ庵うたこころうれ〉　本口
名月面に余不の庵さ文彩〉　芦紅
白面よ見てうさしや智田乃格　京二条　永也
宗合乃船い志川久な量れ〉　一連
稲妻よ猶此頃のふや窓の月〉　八香
淋しさや見てうりて居さる菩提寺　大坂　一孔
結草出や花の咲面とちるなり〉　遠舟

四季不同

月よ問ン糸とうよ字北道の径　江戸　不角
河の碎礫もい秋しわく危なし　大坂　西本
うたろ〉い面よ眠さ樗うれ〉　休斗
汲とめて桃ゥ香ふさ小船ゥ　伊後　時習
端とめて青海ん聴ゥ蛙〉　呑水
見ちうさや櫂なき舟の旅ゥ　大坂　翁舟
誰少〉や池よ蓄ゥ秋の砧〉　遠舟

四季百句

引わやゝ肩かゝるゝ寒宵　都　我黒

竹の子や次第に富士の山もと　なを之　安し

岩たゝき無数まいるの扇かな　〃　直方

竹扶よ花咲よりも菊ぞけ　蕉及　信安

脱捨し帯とはいとや九月尽　〃　素龍

酒呑ぬ人ゝ伝とり表　茂　安江

屠蘇呑人や爆竹のゝ音ゝ　大切　素也

　　遠舟

四季同じくゝ

ゝゝ花ゝ踏ゝ踏ゝ　楊像　西吟

酒よ笑むゝくゝや菜の咲ん　侍後　臣水

菊ゝよ酒碎ゝ者ゝ康の山　勢別　何暮

搗杵のゝくゝ流ゝん秋の磯　都　定方

鉢音や酒咲ゝ彷ゝ　桂りと　如水

一章碎ゝや雛ゝ油ゝ　三番　清流

忘人や高ゝ乃ゝ年ゝ　大切　遠舟

四季不同

黒塚の往来なれば山女郎花　江戸　雪子

出の音に立合せてうり売れの匂　大坂　紫丸

水玉〳〵玉の夫婦うゑ参る梅　伊賀　乃白

冬枯やかたうの下の牛の皆　河州　重行

書と待青や敵をうり加賀文　三条　花籠

出船りや仔ぐまを子ゞ仲の丁　なら　長則

雨り倦立月の餐や恋名川　大坂　遠舟

四季不同

年の暮まく〳〵後て居れの岸儀　大坂　賀子

年くれと鶏なくなる宿茶船　〳〵　如山

月や雲も抱るゐ出れ声　江戸　巴山

寒ふ行程山ゝ七ゝの里　大坂和ゆと　松雪

流星柳よりは降る雨れ　なら　幸国

川ゝと止て行く嘘五月ぶ　〳〵　一途

消ぬ梅乃きハ桃の花　大坂　遠舟

四季不同

こやさ淋と何と鶴ゝ庵　江戸　立志

下戸の入道こそ笑ふ山桜　安江　草也

蕗乃臺花待そその助ゝ　篠去生　一歳

今朝まで恨ゝ来ぬ杜鵑　都　可鳴

松ゝ有る寺い名ゝ木瓜花　下ノ辻　則重

さくさくと婦の髪の結ゝ　大坂　一所

下くる食粒白し水鶏鳴く　遠舟

酒九番や姫山ゝ残るその名　女子　喜雲

邵恰家ゝも遠し沖の舟　桑門　漏舟

姉娘答引さく今朝の桃　安江　笑也

老猫の童仔書る浮世ゝ　黒宮　和窓

ゝ丸月ゝ男うゝむ多郭　大坂　卜有

鳥啼ぬ夜いかゝる蛍ゝ　高槻　令極

凡番ゝて乃歳さく色早松葉　大坂　方臭

凉ゝさの梦ゝかゝひや三ツ社　休計

笠ぬぎて踊るなかの山ぶし　赤川　花荘

雪に月中よ推しぶし　柳　女子　和満

菊作りぶしぬ酒の相ぶし　〃　一連

柳とまとトとを義む月ぶし　〃　可笑

木兎や月の木兎の一ぶし　大坂　遠舟

水多の影と拭とし一ぶし　三番　清流

滝の音氷ぶ魚乃うぶし　女子　言光

冬拍子人と助ケのぶし　〃　糸我

釜と杏で勝ぶ乃義の気　大坂　近弥

細引よ木魂も力いまよくり　女子　安く

炉と塞ぶ乳の心や一ぶし　〃　梅香

梅桜年名色をたぶ乃　〃　南水

残雪乃消て生色し小ぶし　水真　知義

干瓢ぶし笠や山ぶ枝　大坂　伯舟

一束秋草ぶ乃ぶを置ぶ　羅列　政利

ぶ乃心生ぶ女ぶく夜の月ぶ　大坂　遠舟

たゝ月よ年の拍子や衣うく　伯後　秀門

海憲の神や女麻の祈すゝ　くあ江　茅也

初春色や星光り年の暮　伊勢　志淺

未拍ぬうちくたりて落れ松　紀州　一峯

枝ぬけ小町なるや冬木立　赤川　花莊

霜枯日乃出る中乃悟り水　なゝ　光陳

え且や今も神代もいとゝ　〃　安〃

笑ひ人星よ伝向浦一ま　大坂　遠舟

四季不同

芍藥乃莖ふ脉とゝわしくぶ　伯後　茅也

いかなゝん碁盤抗の反れ盃　なゝ　南水

山彦のそらゝ告よそれの時　〃　安〃

江戸桜豐ゝとまゝせ一ま組　〃　円紅

留まりて一盃のむの花ゝ　〃　可笑

玉簾や金乃書なる秋の趣　大坂　遠舟

たゝり止河や娘の紬乃寒　播州　可松

猶まよふ女とりの月えれ　なゝ文　八香
更ぬまとを酒の酒のむ月えぶ　〃　内近
行人の行衣を照る寺まぶ　桑門　滴舟
高ゆ山も警よ氷る手れ　大坂　蘭舟
篠村や今ゆる嚴えうゝ氣　なゝ文　韋川
新蕎のうきく　〃　点存
閑をくやゝ小魚をやる杖ぶ　俳諧小姓　素吟
鴨の足しまうもを拈ぶ　大坂　遠舟

江季不同

寧よ蜜う糊をる沙干ぶ　小中　南水
元日乃人のゝろやたの端　八王子　短羽
橋幅や芝よ芝える夕ゝゝ　大坂粉氏　令極
若なうゝ牧奥わらん芭牧　大坂　芦船
熊谷よ九なうゝ呑月夜ぶ　なゝ文　梅香
雪ゝてゝ月光ゆよゝ入る沈　〃　高光
陸なゝゝ明こわん出月船　大坂　遠舟

雅度はと方角ちよう御子載　かえ　安之
蕪や老間ゝとぬゝれさう　〃　一途
鶯よ鳴〻多もかり　しやんとさ　〃　梅水
ゝ仏や宿とゝ　碧ゝ　都人　大坂　又舟
名松や木賊ゝとゝの牛骨　〃　盛一
ゝ色ゝ富士山　掃る　掃ゝ　かえ　令昭
明鐘や石ゝ佐ゝ子た新山　〃　盛倫
名岡や昼と取ゝとゝ　大坂　遠舟

四季不同

戸袋やゝゝ枝となるゝゝの月　玉置　安之
元をゝて斧研名の賊鄭ゝ　安江　草也
暗鬼して松やく流れる落水　天満　仙之
奥まを女中おとゝゝゝ蛍ゝ　伊丹堀山　雪水
敢の吸ー沈ゝたゝな夕沢蛍　日本野　真俵
流星とかゝて見まい蛍ゝ　〃　水交
仮行や後家の笠ぬくすゝ蛍　大坂　遠舟

眠ささも見るも面白杜若　大坂　露舟
麗しき垣生や見えの燈籠　〃　香止
捨辺の枝ぶり月の前月ぶり　なゝ　梅香
汲井たる山の崩れて月もれ　〃　和海
煙くさやトサカの白粉貨車　〃　一連
特爲して漢よ遠き茶舟ぶり　〃　八香
高ちゝぬ人や彷徨なめて見　〃　長治
涼しさや撰和歌を見下簾　大坂　遠舟

四季不同

春雲よ俵蕉の衣ぶり　大坂　園水
恋人や星ふる簾一臘月　〃　鶯舟
添寝して後や女乃拔敢根　赤川　花荘
子や捨て人の邪ぶれる宵　なゝ　一逢
岩冠よ枝本あやしき麗ぶり　〃　梅水
出る月立なるゝ赤こゝろ　〃　幸山
叢しや深まるの小松原　大坂　遠舟

四季不同

魂棚よ生きんとれを嵐ぞ　大坂　岸策

時雨ちる笠の名りや見世の　なこや　一逸

わら草履なりよりとうり附留里　く　梅香

去れ板し橋乃長山流ぞ　く　安之

若後家の情や月夜ちる念仏　西宮川　坂中

柳乃昼とくやく蛍ぞ　なこや　少計

庵哀れ道法ぞ暮し白拍子　大坂　遠舟

四季不同終

節季ぞ乃郭橋ちる　大坂　釣水

何ぞい夕日ぞ哀れ附留ぞ　く　凡兆

紅粉ちの未れい因乃絵乃　く　園女

夕鳥よ人ぞ乃ちとなる人　尼　出古

ぞちして物ぞ休しぞ乃　俳乳　貞春

猿蓑を拂ぞ乃や恒の拂　なこや　和海女

名の情やとい之なるぞ女哀　大坂女　キ伝

わらるゝや雛の抱よりくれ　同姫　ヨリ
仇人や蚊をこゝかれ面ぬし　同拾女　みを
如月や佛よ悲しかりまうら　聲女　ゆう
文葉や恵らる聲女ゥ夕葉を　大坂　遠舟
蘭佛よ笑立宿乃浴ふ　安江　茅也
白面や子芸のるさ止よう　なを　智倫
水嚢よ松もしよ実東ふ　大坂　如山
天意ゥ湯といまゝ花の山　柱と　如水

まれ花魚よるまゝ俳子ふ　黒宮　和意
下簾ゥ裏ゥまよゥくれふ　川口　春凡
辟さゆや何さの糸と芸　なを　未牧
常火や麗て居ル乃に教ゆけ　三春　佳流
大行灯紙帳の中乃巻れ　二陽堂　令明
外花乃一重扇織や見の独　なを　梅枝
心と沈もお気ゥ麗云よ巻ふ　〃　長則
変なゥ風日ゥ川ゥふ　倫度　今爽

物ゝ腔よこ[illegible]　備後　[illegible]言

仲の石酒乃酒くる徑干ゝ　可笑

花ちりてと酒くく眠[illegible]　長崎信　卜水

酒樽もゝを三日の仏干ゝ　[illegible]　為直

玄関より山ゝ行し帳ゝ舟　和酒

植り行道や橋より連られし　一連

[illegible]のなくい[illegible]ゝ桃の酒　南水

干瓜や東より[illegible]酒ゝ　大坂　遠舟

松茸や隣の料理なりしゝ　[illegible]安

拉かろく茶毋より連る[illegible]ゝ　梅枝

[illegible]のうゝく橋桐い幅乃地獄ゝ　[illegible]

卜戸ちし上戸教る[illegible]ゝ　長治

熊[illegible]毛[illegible]ゝ山ゝ木[illegible]　[illegible]江　[illegible]

煙草や[illegible]小管[illegible]の下　[illegible]江　[illegible]

[illegible]ともとう用より立[illegible]の[illegible]　[illegible]集　柳丈

桃[illegible]より[illegible]ゝ[illegible]の酒　水[illegible]　知義

童らしといえども花乃山　如水（桃の花ちる節句雛の節句）　則重（下ノ辻）

俳子とも略いまし　菊翁　花荘（赤川）

摘物を蒔のうしろや移り和粉　今賈（備後）

いかのうに扇やうりて行毛　〃　華速

六月とい家ゝ盃の和訓かな　〃　華仙

見る孩子児ゝ盃とも毛　〃　乃白

通くや三ケ月古ゆく雲　遠舟（大坂）

花はこそ笑えと結を却て　裁毛（なえ）

夜の月船と橋よ高くへ　〃　八香

鳴ぬ乃ち機嬉いるよ杜宇　〃　竹汁

素面やおのく新を並乃　〃　梅香

山吹や色と風るやさ娘　卜水（長崎行）

面の月い並よ飛作く笠ト　橋水（なえ）

きとときと人やうん白蓮花　如水（桂ゆく）

手鳥の面紅てく弥　西本（大坂）

ちらりもちらぬせんぬ白き雪　天満　豊流

下枝やぬるく時雨の二ゝ月　江戸　不角

炭焼やん易さ此冬袋哉　大坂　未山

節季いもおしも雑はのみ屋く　遠舟

深山色のうゝ孔雀を年忘れ　西鶴

久内農爲牙二

四季　　臘鶯遠舟

いと桜や自然活るを来の松

涼しさや蜑ゝ首出る海ゝ満

秋きし蜑ゝ皮むく磯釣松

出焼ぬるをやいゝの不機関　　俳仙　安江草也

陽垢をぬしや桜のかゝり衣

聚落より汐の花ちる陽炎
微くさ〻羽織より文月哉
桔の枝や炭ようなりても雪の山

安平次章方

右賦人て庚子人を花橘
東光を山さ酒よりも強性哉
金柏よ蓮人て新れ朝
大哉の君よ似ることを賦こ亀

大坂信保直

玄圃て硫黄やをつま羊
夕涼こ今紀の言葉や笑えた
蓮の葉や裏わ表を秋の風
汲汐や柏山えこ紅葉こ

大坂信舟彩

若を呼や榊くのか弱くし
郭こ載わるこ乃めり乃

蓮を名ゝ[illegible]て[illegible]
人寄る水の下乃本縄哉

赤川六翁

優の水錦ゝ[illegible]ら[illegible]る[illegible]日ふ
[illegible]風烟胡風ゝ作る葉も[illegible]
仇人も待ちゝ[illegible]る秋の音
狐鶯やすゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

曇居本口

[illegible]ゝ[illegible]二日条や爰ゝ[illegible]
新法師見ぬ[illegible]の梢哉
大児や寒ゝ[illegible]ゝ[illegible]去狐わ[illegible]
[illegible]声の[illegible]る本縄ゝ

松風新西流

世の人ゝ腸ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
塔ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
彼岸ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

落の葉や面と焼葉出焼

大坂住休計

白桃を酒よ問まん曾うれ

松の戸よ淋い黒き敢やうち

衣擣相よまるしふ小三のふ

ぐろくと附粧夏又ハ枯粧ふ

清水氏吾嘆

落葉いりうまむ葉の葉

深面よ和布かふ女乃築蜂鬚

書よわさ孫廉の山詩や呂一ウ

懸蹄よ寿とうまを引如象

守談堂隣朝

降面や家古ロの梅れ書

ム月面よ面ふれの石窪ニ引

稲妻よ人おちらく細ふ

灯火とわさと消うり浦ある

三番梅林清流

梅ゝ香や夕ゝ雲程よ紙乃裏
卯の花や信濃路の面影ゝ
下戸一人美よ月ゝる今宵ゝ
孫宮達や結ゝるに眠ゝ三弥月

大坂星爾和水

髪ゝ切ていよゝく嫌ゝ梅ゝ花
牧乃老ゝ恨ゝを問ん思ひ書

月のせゝ戸達ゝもゝてゝ芭蕉ゝ
初雪ゝ小紋乃衣ゝ美ゝたゝり

本宮行諸川梅水

雪ゝ戸人家ゝまゝしなるさゝゝ花
反近ゝ蛍ゝ蛍ゝる小ゝ川ゝ
生垣ゝ姫のゝ嫁ゝ蔦ゝ紅
日面ゝ高なゝき里に咲ゝ

大坂紅梅今極

今朝抄まさりぬ去年乃氷に
殺させて我ことをなや燕より
継母ともるを見せ度桜に
月代を揃ると為乃登りに

大坂住 一行

此裏に飛るところの胡蝶に
明るには鳶にとられる覚に
角かくす飛しも明し

乗也声

寡崩を妻子や多寿所に

赤川住沖之

泌汗に三月つゝのみ筆尾遠ん
一年や括白春に春かくされ
見るなれかしく打ぬくる踊に
此ほ半の小このおしき枯野に

松江住益田直元

年さしめ鳶のちりぬかもんに

和声や少し美なりかなくえ
野菊黄ぬ雲よ雲と
大雲よ彩乃宮こゝ戸小

本宮後宮[illegible]

庇うや西月みて月とこゝ
夕鳥や鍵子の郎屋の子
秋の夜や寝なくゝ法師ゆゝり
初雪のさえぬるや恋乃恒

大坂住麻山

佐向や高いうゝ山くゝ山さゝ
竹の子に生のげくゝ毛ゝ膝行
雨しくゝ抜して凡ゝ子義武
雪よ似くゝ彩紅葉て行元象

素門漏舟

雲雀なくゝ野寺の家の動ゝ宮
夕立や船撫よゝ元中洲川

廉節も耳よこそる春の曙
風の弦を唱ふや秋ごころ

於宮後玉置安之

我とおよ冨士乃高や八三日
郭公高木うる人と伯こゝろ
猶書や梅凉書き形也
恍うゝし弓よゝし名乃筆の書

於宮後小中南水

あゝ孔世よ冨士乃吉野の桜ふ
ゝ竹を見てゝ人とうゝき家子ふ
花ゝ孔ゝ出ゝて咲ゝけん流の月
時雨しゝて小ゝる見ゝる柳ふ

追加

大坂住柏木松壽

子日ゝ日ゝ行ゝ行ゝゝ脂臭一
思ゝまゝて風乃形ゝる敬ゝ

皆石菖蒲の流るゝ紅川
楊桐竹よ高山の端の春雨室

又

一隅や梅の枯くく道火燵　大坂　由平
むめ植もゝ人もよすがら　都　心來
涼しさの竹樹の行方　江戸　芭蕉

久保乃屋之三

百韵之内十八句　松壽軒西鶴

日本道よ山路つゝれる武の蔦
鶯鳴も月ふなれく人ぞ恋
役ゝ笠秋の夕影よ見尽して
蓮の池たゝむ岩乃紅葉
埋木よ元付貝の若と成

秘蔵の名ゝ鶯 妙薬
カンシンの軍を作る所を責て
子ともにこゝろ宮の言の葉
化物の色さく梅を誰をるとゝ
ゝ紅よ ゆるむ 明寺
胞衣掛の首長い蔦よりかゝれて
奥白玉よ 美乃 ゆまゝ
琴の言よ 兎のふるい毛ゝ

那の猫ゝさのよ ゝ
ゝゝ鶯ゝよも同じ髪を刺
言葉入わゝる 鶯ゝ
大晦日ゝ 晴よ ゝ
姫よ ゝ 乃 合 湯衣

十八句

本宮小中南小

ゝ係をけよや 女よ 梅 拾

悵こゝく文ほ者花 恨 義 住居 西木

愚うなる物は皮八月のさゝりそ 獲麿 遠舟

糸而乃蘭をい 捷かゆる人 水

風なを碁ゝと 浩ゝ秋の書 木

わりてを麗ゝ 菓子の栢ゝ 舟

ウ

燼ゝ小ゝ家の ゝ ゝ 水

様ゝ ゝ 拂ぬ 姫ゝ なく 木

見ゝ やとを歩ゝ 舟

文と届ゝ 作東乃 牛山 水

注命横ゝの 程も義ゝ ゝ 木

盈まゝく 船ゝ 船のゝ 舟

ゝ所い有明 なゝる 孫ゝ 捷 水

秋のゝ ゝの書 ゝ 木

窓支ゝ久米の 岩橋 附 舟

ゝ名の ゝと 流を谷水 水

書ゝ答ゝ花 ゝのて 木

おつ[illegible]核乃はゝとそり海　舟

十八日　臘月遠舟

冷汁やい川湯をあて　伊勢海

わゝ和布いたゝふ南の幸は　玉置　安之

芦の迹い面のまに暮うゝく　仝

京よたゝを打とけつゝ　舟

辟ていと丸くなる月乃　仝

碍乃わるゝ灯と消し　之

人ウ[illegible]れと幃つゝむ小笠恒　舟

我てよ乃ゝる夕暮乃牛　之

表もとゝも冬田乃蔦稚搭ゝ　舟

姉背の中やゝと陽とゝ　之

侶と兼抗たゝる和くゝ　舟

茶ちゝひや雲さゝゝ　之

香もゝとゝ鶯の啼乃山　舟

見えそうたにさゆる紅葉　之
かなんや嵐の下なる附袋哉　舟
幸加賀乃橋い書よ端之　全
本食よ花まるるるるて　之
加月　七日わうるきの水　全

十八句

世の中の松よ和さ哉時雨　三原住安江草也

色青しい井戸の小柳
住見立誉の人をを吹立て
東分峯よ明ら霧　月
通しの霧霧の三りよ緩消
下雅ら志川じ　植ちきの流
志人の方と見て市東経
なみきの小川神乃女月西
を習る人をつ廉子紋

[illegible]寺のくま
[illegible]人と彩の紅葉あるよく
用の宿として泊るまし　やい
三日月の照まねくてあの山
[illegible]もれ落ちる秋の末
下[illegible]こえて浪冷わる屋田水
[illegible]屋とうかゝ　[illegible]ゝ　扉
かゝ[illegible]又花よりなり世のはしく

[illegible]乃八重と　神[illegible]　[illegible]

十八句　　大坂住柏下松壽

捨ぬ乳ぶいるよしくれの磯別松
ちひたこせよ　[illegible]　二日月
玉鉾のかゝ[illegible]ほと月の[illegible]
[illegible]をうちこそ下戸の[illegible]
[illegible]の[illegible]風[illegible]乃葉[illegible]

ウ
たゝ隠よ　霧乃　海つを
謀を　山のわ形の　庵さも
人乃日和　かくし　落中
世の弐や　才よを　ゆんも　法寺
牡丹を　説と　書まゝ
大ゝ　此の　侍ゝ　灯蛾
わゝ　せよや　ふさゝ　きの
正月を　形むちゝの　袖や　ん

わるもゝて　競ゝ　帝　雲ひ
義しき　人も　形　絵乃者
我　変る　ゝけ乃　慶の　桃　楚
花みも　過な　紀　多月　表
やゝひの　丁此　重ゝ　相　ゝ

十八句

大坂　紀彩西流

牛の歩を　今日　八　書ゝ　文月　川

楼たゝく人乃藻かゝる
松風よ笠地石和たく時雨
見おろせ谷よ中乃網
篝さけて鹿角月よ指出の
書けて伊吾波高の紅葉
ソノ京よ恋の篠乃花ゝ
自然とうたる大内のぬま
詩を乃のよ時志れさよ

至ゝく言乃ゝ乃
陸の海と月の出雲ゝ
影寒乃むしる鬱のうゝ
世ふ猫り毋とゝぬすやる
情て義好よ名い富士の山
令川哮て通る縄乃川
投りしゝゝとゝの白紙
自他ゝて金平孫ん花墨

孫生のこゝ海いとも持さし

十八句　　大坂信濃水口隠

面白く柳いとゝの常なれ
見しらぬかたの雲れ座也
夕雷なる夕アれ砂乃酣
鄙みなせしる凡のまゝ
寧乃月の夜如る籠の行なく

和尊とゝ〻ゝ海中乃篇
三花実れけなくいと深
律作よさゝ原爲うてさ
月乃月と懇わることよ待ゝ
或い柔よ鄙中　原させ
双六よ員れも志乃生惜く
浸てさゝ原梅面の乱れ
塩竈も燈孫いゝ茅れ能志り

壞るやうぬあるきの陣小屋
月新に俤おかるもしらく
仮に連れ立ての袖
そひよも花の蒼の笠ひけ
声おしまぬ鶯の音

十八句　赤川任六翁

焼餘を炭黒しや二三月
いつしの花に猫の居るる

自由さハ人の揚の糸にて
芥をあてもトくるる
さるきの光も鉢に所
千石をうり秋を苅元
拵廉のわもてもうゝ荒業
面をく拵戒のいとまき
迷老に金てく命の見てな
公儀ざるくうのへてを

弱女六中よ若ゝ[illegible]
[illegible]の蓑の童と行と
[illegible]なとぬ[illegible]の[illegible]
今ゝ[illegible]と声とく〳〵合佛
役者紙[illegible]
[illegible]
十余丁為[illegible]石藤川秋の風
[illegible]

十八句　大隆佐勝崔黄

明橋を渡りよ砂ん花乃沼
楚とたゝむ雲の山法
[illegible]
雲乃[illegible]衣紋のさゝめる
何しゝを[illegible]月の出立
拙責季[illegible]秋とはゝや
龍田姫[illegible]自慢の[illegible]

拙きなりの萩乃うゝ風
幸余る高砂いんやくまひ
思ふ庵をそこらかるひし
面白の影一はをおそ絡しく
ゆくすまくく念彼観音
参信八明日のうらをいるさん
をけ瓢箪宮雨しき
庭中の松よい月の新禄

きぬるこの梅子思ひきら
腸をこの霧船しくく
乳をこそぬるこれ美し新

十八句

赤川住花荘

わら苣い首をうもたくく
霧の中をとりけく行雁
蔵連一胡蝶と峯八人をうて

蛙や松の枝くゝる月
縄を切く押かと秋の海
たゝ立さゝく磯をこゝ乃ゝ

ウ
白菊よ化をこゝいゝ多狐
山の遠奥くゝくゝく解に
ゝゝとゝゝるゝを忘る孫の元
菱よゝゝ忘る母のかを新
ゝゝゝ星をよゝこゝん忘衣

寡孤ゝひゝ前乃せれ羅
ゝ君の程ゝをいゝ成こゝれゝ
氏ゝ偽しゝく峠ゝゝくれ
月流と秋を岡しゝ屋ん
鈴森ゝふ賢孫の茅屋
花咲ゝ地ゝ義よ持ゝ竹のゝ
ゝく流りし長の孔信

十八句　　女宮玉置安之

法相も梅よりかをるうぐひす鳥
かすみうすぬ山の親雉
東戸の音と燕の関なれて
月待蕗の首なうなる
梅の花粉ふる秋とさそ寂寞
ふるとしの人の恋
大岳のうに雀の形をけ

高野と云ふ仏法ふ
高ひしも未のせ嶽の鐘の峯
そゆへ警ふ巣となく
鶯も目をさうる宣の内
杜鵑啼くり月の入る
門よ的るぬ子をまえ
孔雀をあけよ波の底人
不三のの弱とい何の京と雲

次の汀なる仏 思ひ
風流も花の都の紅葉狩
羽織も袖も 曇る 地

十八句　　女官住小中南水

菊酒や窓の梅よりおとらぬ
秋と生まる小刀 杖京
蝶 鶴を明るい世の夢りて

月の国 こゝり 遠しさく
知人を庶とゝ云ぬとりこ
立稲衣 俤名 わらこゝ
ウ 紅葉くゝて西所の立稲衣
文よ れこゝ 其 江戸云家
衣 義 と 富士 の 士 は 雄下 ま
とや 六十 乃 月 は 吸 稲
わりゝて 稲 の 庶 生 て 毫

小倉山雪の花の秋
雪ふりて日の暮るまで暮やら
蓬を分けて時鳥の
中うちふれる雨しの降り
花の散り重なんいさ
おもの者挑灯対月晨老
去る月を乃
暮れ花さ

十八日　臘詣遠丹

うり晨を言乃言ふ乃多晴
ぬぐち見てを色の月
可延かふ延乃松の花
たて年生や猿の声とく
岩たて来よ陸奥
よこして降る天乃羽衣
樹本のろさくる日のかり

国と申げて風と呼ぶ家
妹と背い日中の帷子着ぬ
わが新わらふ 候体の為
深川やうよる文書名より川
花ムケるる 寄れ三月
婚姻豊深堂れ秋の深
高乃うらを為る石士
宰や刀の乃血れ温き

うち帳ふ家 臣家
花鳥よ名の奴とたとられ
移りとやはる 殺伐はの桜

蹉

腦麿

行くの三人何一人の小中南に似り
一人い玉置安に似り今より獲麿
遠舟よ似とや 物して似んそれと

久遠乃舊といふ名色この園の意よ
帝ぬ舊の声きけと小泉はかく乃
嬉やこゝろ名きさまを過る俳諧の
父を尋るよ父と尋と絶ぬ京極
黄門の昔刻よこの山きと考く今きと
嘘とし泥ぬきこ似てんこのと久遠の
舊とこゝろよりあり

京寺町二条上ル丁井筒屋庄兵衛板